

生きる・支える

障害者、自然体で喜劇

兄が監督務め 川崎舞台の映画

川崎市で10月に開催された「KAWASAKIしゅり映画祭」で、ダウン症の男性が主演したコメディ映画が公開された。監督を務めた兄が映し出す障害者の自然体の姿に「健常者との懸け橋になる映画」という声寄せられている。

「健常者との懸け橋」反響

映画祭で先月公開



題名は「39窃盗団」。心的障害者の不法行為を罰しないと定めた刑法39条にちなんだ。監督は東京都町田市の押田興将さん(42)。知的障害があるダウン症の主人公キヨタケを演じた実弟の清剛さん(34)もダウン症だ。



「知的障害者は罪を犯しても刑務所に入らなくてよい」と思いこんだ仲間に誘われ、泥棒行脚に出かけるキヨタケ。空き巣を繰り返して警察に追われ、酔っぱらいに殴られ、野宿生活者になった後で逮捕され、有罪判決を受ける。

空き巣に入って財布やカバンを盗むように仲間と言われたキヨタケは、熊の置物などを取ってくる。それでも笑って別の民家の空き巣を促す仲間との関係がコミカルに描かれている。興将さんは川崎市の日本映画学校(現日本映画大学)を卒業。「うなぎ」を撮った今村昌平監督のスタッフになった。本業は資金を募り配役を決めるプロデューサーで、劇映画の監督は初めて。「切実なテーマに向き合ってもらうため、あえてユーモアを交えた」横浜市で育った。8人姉弟の長男。中学時代、周りに理解されていないと思いついて家庭内暴力に走った。木刀を振り回して姉弟から敬遠された。そんななか、清剛さんとの短い会話だけが救いだった。スムーズな会話はできず、「飯食ったか」と声をかける程度だったが、家族で唯一、つながりを感じられた。「いつか弟を撮りたい」と約15年前から企画を温め、2009年から学校のある新百合ヶ丘駅周辺で撮影を開始。セリフのある場面は1回だが、時折機嫌を損ねて動かなくなる清剛さんに大好物のコーラを飲ませて演技を促し、2年後の今年、完成した。

映画祭の最終日に特別上映されると、全113席が埋まった。養護学校の元職員は「障害者の様子が自然で、健常者も寄り添いすぎず対等に描かれている」と映画祭事務局に感想を寄せた。福祉施設職員は興将さんに「上映活動を応援したい」と声をかけたという。

町田市で両親と暮らしながら作業所に通う清剛さんは「ドラゴンボール」が好きで、放映があることを知ると同じチャンネルでテレビを見続ける。興将さんはそんな弟が時々うらやましくなる。「自分を疑わず、あるがままに生きる。それだけで人生は素晴らしくいってことを伝えたい」

(鹿野幹男)

●押田興将さん＝川崎市麻生区
●清剛さん(右)と共演したもう1人の弟大さん＝押田興将さん提供